

## FUJI TEXTILE WEEK 2023

## 「アート展」参加アーティスト

※五十音順

ネリー・アガシ／

| 展示会場 旧山叶

## Nelly Agassi

1973年イスラエル生まれ、シカゴ拠点に活動。パフォーマンス、インスタレーション、ビデオ、アニメーション、テキスタイル、紙作品など多分野で活躍する。主に物質、身体、空間を扱う作品が多く、建築と関連した公共空間に関心がありサイト・スペシフィックな作品も制作する。作家自身の個人史や人生経験から紡がれた“脆い糸”を通すことによって、場所の記憶や歴史の断片を炙り出そうとしている。

作品はグラハム財団シカゴ、シカゴ文化センター（シカゴ・ルーム）、イスラエル博物館、テート・モダン、テルアビブ美術館、ミラノ・トリエンナーレ、ザヘンタ国立美術館（ワルシャワ）などの施設やギャラリーなど各国で展示されている。

非営利団体 Fieldwork Collaborative Projects の共同設立者で、2019年度グラハム財団フェローでもあり、作品は国内外の美術館や個人コレクションに収蔵され、近年ではシカゴ美術館に収蔵された。今後はフォクサル・ギャラリー（ワルシャワ、2023年秋）、ORD T5 委託プロジェクト-シカゴ・オヘア国際空港ターミナル（2023年夏）での個展が予定される他、グループ展では Pola Magnetyczne（ワルシャワ、2023年秋）、国際アート見本市ウィーン・コンテンポラリー（2023年秋）等が開催される。Dvir Gallery（テルアビブ）、Pola Magnetyczne（ワルシャワ）ギャラリー所属。



Photo by Itai Neeman



参考作品 《mountain wishes come true》 From the exhibition "No Limestone, No Marble" "The Quiet Before the Storm" 2022 Photo by Clare Britt Sound: Ryan Packard

池田 杏莉／Anri Ikeda

| 展示会場 旧山叶

1997年福岡県生まれ、千葉県を拠点に活動。東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻在籍。パリ国立高等美術学校に交換留学。人々に使い古された古着や家具といった物や、皮膚の型の収集。また、その物に関する記憶について、インタビューを通して「それぞれのかたりて」をテーマに彫刻や、インスタレーション、パフォーマンスを発表。

使い古されていくにつれて、色褪せ、歪んでいく衣類や家具。それらは、人々の身体の癖や匂いといった特徴に寄り添い、身体性を帯びていく。また皮膚は時間が経つにつれて、剥がれ、少しずつ生え変わり、絶えず私達の体内外で、身体を消費させながら、毎日、毎時、毎分と、その都度変化し、誕生と死別を繰り返している。その身体と物との間にできる必然的な関係性と、自身の「身体を喪失する」経から、喪失した存在と対峙する空間の中で、私達に何を語り、想起、想像をさせるのか、見つめている。

A-TOM ART AWARD 2022 ソノアイダ賞、アーティスト インレジデンスソノアイダ新有楽町に参加。



Photo by Junpei Hosoda



作品イメージ 《それぞれのかたりて / 在り続けることへ》 Photo by Anri Ikeda

## 沖 潤子 / Junko Oki

| 展示会場 旧糸屋

1963年浦和市生まれ、鎌倉市を拠点に活動。生命の痕跡を刻み込む作業として布に針目を重ねた作品を制作。下絵を描く事なしに直接布に刺していく独自の文様は、シンプルな技法でありながら「刺繍」という認識を裏切り、観る者の根源的な感覚を目覚めさせる。古い布や道具が経てきた時間、またその物語の積み重ねに、彼女自身の時間の堆積をも刻み込み紡ぎ上げることで、新たな生と偶然性を孕んだ作品を生み出す。存在してきたすべてのもの、過ぎ去ったが確かにあった時間。いくつもの時間の層を重ねることで、違う風景を見つけることが制作の核にある。主な個展に「月と蛹」（資生堂ギャラリー、東京、2017）、「Truly Indispensable」（Office Baroque、ブリュッセル、2019）、「anthology」（山口県立萩美術館・浦上記念館、2020）、「沖潤子 さらけでるもの」（神奈川県立近代美術館 鎌倉別館、2022）、「よれつれもつれ」（KOSAKU KANECHIKA、東京、2022）など。主なグループ展に「みちのおくの芸術祭 山形ビエンナーレ 2018」（文翔館、山形、2018）、「現在地:未来の地図を描くために[2]」（金沢 21 世紀美術館、石川、2019）など。2014 年には、自身の撮影による作品集「PUNK」（文藝春秋）を刊行。作品は金沢 21 世紀美術館に収蔵。また 2017 年に第 11 回 shiseido art egg 賞を受賞。

協力：KOSAKU KANECHIKA



作品イメージ 《anthology》 © Junko Oki, Photo by Yasushi Ichikawa

## 清川 あさみ / Asami Kiyokawa

| 展示会場 KURA HOUSE

1979年兵庫県淡路島生まれ、東京を拠点に活動。90年代より雑誌の読者モデルとして注目を集め、2000年代には文化服装学院にて服飾を学びながら、「ファッションと自己表現の可能性」をテーマにアーティストとしての創作活動を開始。2001年に初個展「SAUCE」を開催して以来、国内外で多数の展覧会を開催し、その活動は常に高い注目を集める。ソーシャルメディアや雑誌などのメディアシステムを通して日々膨大な情報に晒される社会で、個人のアイデンティティの内と外の間を生じる差異や矛盾に焦点を当て、可視化する。写真や雑誌、本や布に刺繍を施す独自の手法を用いた作品でよく知られ、代表作として「美女採集」「Complex」「TOKYO MONSTER」などのシリーズがある。近年は表現・活動の領域を広げ、衣装、広告、映像、空間、プロダクトデザインなどのクリエイティブに携わるとともに、絵本の制作や地方創生事業にも取り組む。



参考作品 | Serendipity / 2023



## STUDIO GEOMETR

リンダ・カプラノヴァーとクララ・スピシュコヴァーは、2008年にプラハの美術建築デザインアカデミーで出会い、2016年建築の内装デザインやファッションに重点をおいたテキスタイルの創作スタジオ、Studio GEOMETR を設立。主要な作品は、伝統的なイカットの技法を使ったタペストリーやテキスタイルによる壁面絵画である。創作には手織り機と、家族経営による最後のチェコ製織工場の協力を得た工業用織機を使用している。外界の風景と心象風景そしてその幾何学から着想を得た創作の意図は、鮮やかな色彩で縦糸に描かれた絵画によって表現されている。建築家との協働としては、プロジェクトごとにテキスタイルによるアートワークを担当（Dagmar Stepanova 主宰の建築スタジオ Forma Fatal による個人住宅プロジェクト Achiote/2022 および建築スタジオ Malfinio による集合住宅プロジェクト E07/2022）。

2018年チェコランドデザインアワードで2017年度の新人賞を受賞。その副賞として各地にあるチェコの文化機関への研修訪問の機会を得、東京のチェコセンターを希望し来日。この研修旅行をきっかけに2021年金沢のギャラリーSKLoで展覧会を開催。



Photo by Jan Hromadko



作品イメージ 《Changes of the Mountain》 Photo by Gabriel Urbanek

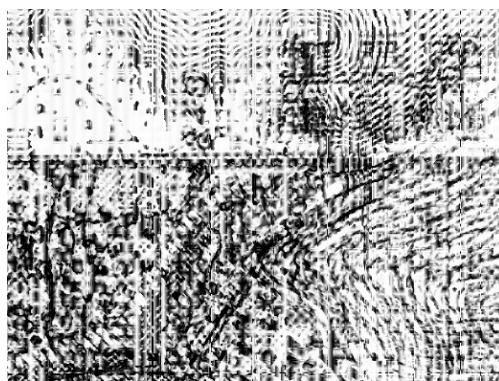
## 顧剣亨／Kenryou Gu

## | 展示会場 旧山叶

1994年京都生まれ、上海育ち、京都を拠点に活動。京都芸術大学(元京都造形芸術大学)現代美術・写真コース卒業。大学在学中にフランス・アルル国立高等写真美術学校へ留学。

移動することで得られる自身の身体感覚を、風景が蓄積するひとつのフィールドと捉え、そこから収集された情報を変換・再構成する装置として写真を拡張的に用いている。時空間を編み込む独自の手法によって、情報の背後に潜在している未知のコンテキストを提示している。

主な個展に「アベルト 18 顧剣亨 陰/残像」(金沢 21世紀美術館/金沢/2023)、「A PART OF THERE IS HERE」(YUKIKOMIZUTANI GALLERY/東京/2021)、「15972 Sampling」(SFERA/京都/KYOTOGRAPHIE 2019)、「Utopia」(GALLERY WATER/東京/TOKYOGRAPHIE 2018)、「霧霾 | Wu-Mai」(ワコールスタディホール京都ギャラリー/京都/2018)、「Utopia」(元淳風小学校/京都/2018)など。主なグループ展に「ENCOUNTERS」(ANB Tokyo/東京/2020)、「Collision point on the dimensions」(The 5th Floor/東京/2021)など。主な受賞歴に「KG + Award 2018」グランプリ、「sanwacompany Art Award / Art in The House 2019」グランプリ。



作品イメージ 《Map Sampling\_Fujiyoshida》

ドキュメンタリーアクター。幼児より修する日本舞踊から得た「筒（つつ）」という身体感覚を手がかりに、演技と共同体を中心とした様々なプロジェクトを展開する。複雑な他者をそのまま引き受ける手段として演技を捉え、人間の可変性と出会い続ける。2022年から山梨県河口湖に拠点を移し、アーティスト・ラン・レジデンス「6okken」を主宰。クマ財団クリエイター奨学金5期生。第28回学生CGコンテストアート部門最優秀賞を受賞。近年の活動に、「全体の奉仕者」（ANB Tokyo 他、2022）「Backflow to the junction」（ニューヨーク市、2019-現在）ドリス・ウーリッヒ「Habitat / Halle E」（タンツククォーター・ウィーン、オーストリア、2019）への出演、個展「地上」（十和田現代美術館、2023）など。

助成：公益財団法人クマ財団

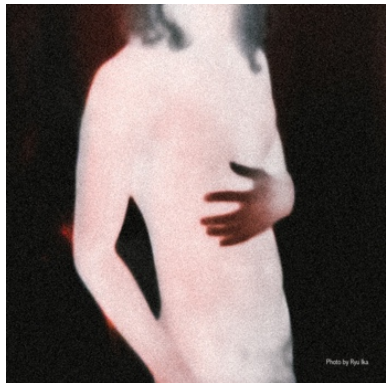


Photo by Ryu Ika

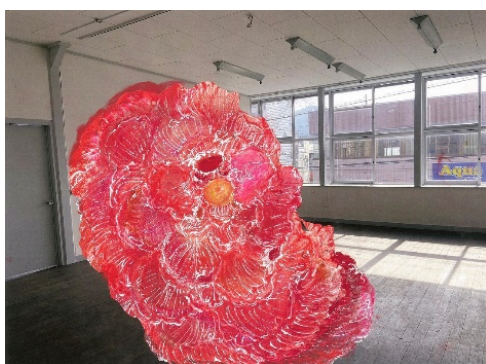


作品イメージ 《unsound dresser : 化粧箱、鳴ラナイ》

1990年生まれ、東京を拠点に活動。看護大学を卒業後、精神科病院で約5年間勤務。学生時代より自身や他者への装飾を制作し発表。病院勤務と並行して山縣良和主宰のファッションスクール「coconogacco」で学ぶ。2018年欧州最大のファッションコンペ『ITS』にて日本人唯一のファイナリストに選出され、3Dペンで作った服が注目される。2019年10月より、新たなファッション表現の可能性を探りに“当事者研究”発祥の地である北海道“浦河べてるの家”（精神障害当事者等の地域活動拠点）へ勤務し、リサーチと制作を行う。2021年10月より東京工業大学リベラルアーツセンター教授の伊藤亜紗研究室で学びながら、「ファット」な身体との付き合い方を、衣服の共同制作を通して研究中。



Photo by Kohei Shikama



作品イメージ 《ねんねんさいさい》

PACIFICA COLLECTIVES /

| 展示会場 旧糸屋、SARUYA HOSTEL (販売)

パシフィカ コレクティブス

インテリアとアートを融合させたアーティスト・インテリアブランド。アーティストやイラストレーターとコラボレーションし、主にラグやクッション、時計などのインテリアグッズに作品を落とし込む。アート作品のような“コレクションしたくなる”インテリアグッズをメイドインジャパンにこだわり、手作業で制作する、アートラグの草分け的存在。2020年より東京九段下にヴィンテージ家具やアート作品を展示するギャラリーをオープン。KINJO、Tomoe Miyazaki、FACE、花井祐介、安野谷昌穂といった国内アーティストの他、Jeffrey SincichやNathaniel Russellなど国外のアーティストとの共同制作・展示企画を行う。これまでに代官山蔦屋書店や新宿伊勢丹などでイベント・ポップアップストアを主催。

# PACIFICA COLLEC TIVES



作品イメージ 《Small Factory》

ユ・ソラ /

| 展示会場 旧文化服装学院

YU SORA

1987年韓国生まれ、東京を拠点に活動。2020年東京藝術大学大学院美術研究科彫刻専攻修士課程修了。刺繍の平面作品や立体作品のインスタレーションなど、白い布と黒い糸を使った作品を展開している。2013年黄金町バザール参加、2018年Tokyo Midtown Award優秀賞を受賞、2019年六本木アートナイト参加。2020年第68回東京藝術大学修了作品展賞上作品・杜賞。2022年sanwa company Art Awardグランプリを受賞。近年の主な個展に「もずく、たまご」(資生堂ギャラリー、東京、2023年)、BankART Under35(BankART KAIKO、横浜、2022年)、「普通の日」(あまらぶアートラボ A-lab、兵庫、2021年)、「些細な記念日」(ロッテギャラリー、ソウル、2018年)、「引越し」(YCC Gallery、横浜、2017年) など。



Photo by Hajime KATO



作品イメージ 《日々》「日々を重ね、」Mixed media\_installation\_2022



1973年中国生まれ、香港を拠点に活動。主にリサイクル素材を使ったミクストメディアの彫刻やインスタレーションなど、サイトスペシフィックな大規模作品を得意とする彫刻家。土地の歴史、文化、時事問題に関連する問題を探求する非言語的な会話や対話に関心を持つ。パブリック・アート、伝統工芸の喪失と再生、人間とモノの循環、一見些細な人間の物語を歴史の大きな流れの中でとらえるようなテーマについて考察している。

瀬戸内国際芸術祭（2013年）、台北当代芸術館の「香港ウィーク」（2015年）、デンマークのアロス・オーフス美術館の「A New Dynasty-Created in China」（2015年）など多くの国際展に招待されているほか、世界各国のアーティスト・レジデンス・プログラムにも参加。

直近では2023年アート・バーゼル香港のエンカウンターズ・セクターで、宙を舞う大型のインスタレーション作品を出展。傘の生地を再利用した14メートルのパッチワークと工業用手押し車で作られた6つの椅子から構成され、労働・アイデンティティ・都市の集団性の問題を提示した。

Sponsor : Nelson Leon



参考作品 《あなたの山を探して》 ©Axel Vervoordt Gallery and Artist

## 総合ディレクター

### 南條史生コメント

FUJI TEXTILE WEEK のひとつの特徴は、地場産業のテキスタイル産業を「産地展」として多様な角度から検証しつつ、「アート展」においてはその創造性をアート作品に見だし、そこに新たなテキスタイル産出の発展の可能性を期待するところにある。それはテキスタイルの生産過程、色や形、デザインと用途、素材の多様性などから検討するだけでなく、アートの持つ隠喩や表象としての詩的・美的表現言語を用いてテキスタイルについて再考し、そこに新たな創造の契機を見ようという試みでもあるだろう。本年は、テキスタイルの原材料である糸に注目し、「糸に戻る」というテーマを掲げている。それはテキスタイルの材料である糸が、どこでどのように作られ、それが環境にどのような負荷を掛け、また社会にどのようなインパクトを与えているのか、あらためて見つめ直す時代だからでもある。そこで「アート展」もできるだけ糸を想起させる作品やプロジェクトを紹介する。その表現形態は、刺繍からファッションまで幅広く、また街中の閉まっていた商店での展示をそのまま使いインスタレーション作品としたものも登場している。本展は使用されなくなった町中の店舗や工場の廃屋などを展示会場にしているのが特徴の一つだが、その結果ここにしかない独自の空間にそれぞれの作品が展示されることで、サイトスペシフィックな対話が生まれていることも鑑賞者にとっては魅力のひとつである。富士山麓の織物山地、富士吉田という街。それを取り巻く環境と、アーティスト達の自由に飛翔する創造性の発露を楽しんでいただきたい。



南條史生 森美術館 特別顧問/キュレーター/美術評論家/  
エヌ・アンド・エー株式会社 代表取締役

1972年慶應義塾大学経済学部、1977年文学部哲学科美学美術史学専攻卒業。国際交流基金等を経て、2002年より森美術館立ち上げに参画、2006年11月から2019年まで館長、2020年より特別顧問。1990年代末よりヴェニスビエンナーレ日本館を皮切りに、台北ビエンナーレ、横浜トリエンナーレ、シンガポールビエンナーレ、茨城県北芸術祭、ホノルルビエンナーレ、北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs等の国際展で総合ディレクターを歴任。2019年の森美術館の「未来と芸術展：AI、ロボット、都市、生命一人は明日どう生きるのか」では自ら企画を担当。著書として「アートを生きる」（角川書店、2012年）等。

## キュレーター



アリエ・ロゼン 駐日イスラエル大使館/文化・科学担当官

イスラエルで兵役を経験後、ギルドホール音楽演劇学校(ロンドン)で舞台芸術を学ぶ。2006年にナショナルシアター(ロンドン)にてアシスタントとして勤務。その後、ナラガット・センター(テルアビブ)、カルチャー・デパートメント・プロダクション(テルアビブ)、在テルアビブのポーランド文化センターにてプログラム担当などを経て、ピラミッド社勤務。2016年末より現職。



丹原健翔 キュレーター・作家

1992年東京生まれ。キュレーター、作家。アマトリウム株式会社代表。ハーバード大学美術史卒業後に展覧会の企画、キュレーター、作家としての活動をスタートさせる。20年にアートスペース「新大久保 UGOJ」の立ち上げに関わり、21年12月からは「ソノアイダ#新有楽町」のプログラムディレクターを務める。これまで手掛けた展覧会に、「森山大道展」(19年、kudan house)、「過剰な包装」(19年、都内某所)、「ENCOUNTERS」(20年、ANB Tokyo)、「You (We) Are Beautiful!」(20年、新大久保 UGO)など。

作家、作品画像は以下よりダウンロードしてください。  
またキャプション・クレジットについても指定の内容の併記をお願いします。  
掲載に際しては、恐れ入りますがPR担当までご連絡ください

<https://tinyurl.com/fjd6x3ba>

PR担当 N&A 内 鎌倉 050-5530-6731 /press@nanjo.com